

# 那珂川町図書館

## オススの1冊

『字幕屋は銀幕の片隅で日本語が変だと叫ぶ』

太田直子／著 光文社【801.7 才】

みなさんは、外国映画を字幕で見るときに、自分の考えた訳し方と字幕に出てくる台詞が違うと感じたことはありませんか？今回は、映画字幕翻訳者の太田直子さん(代表作『初恋のきた道』『シュレック2』)によって書かれた『字幕屋は銀幕の片隅で日本語が変だと叫ぶ』という本を紹介します。

本書では『学校のテストでは満点をもらえる正確な翻訳も、映画翻訳としては0点ということもある』という文が出てきます。この文が表わすように、正確な翻訳をしたとしても、映画翻訳においては、演者が喋っている時間を超えてしまえば、画面から文字が消え、見る側は物語の把握が困難になります。そのため、字幕というのは、1秒につき4文字の翻訳が原則となっており、実際の台詞の内容をコンパクトにする必要があるそうです。このように、本書では、映画の字幕翻訳の裏側などが紹介されています。

例えば、字幕には句読点が使われません。なぜなら、句点を使う場合は半字分、読点を使う場合は一字分のスペースを開ける、という字幕翻訳の作法があるからだそうです。しかし、その一方で、句読点の有無に関する理由は曖昧だと書かれています。

句読点が使われない理由として、著者は2つの推理を挙げています。そのうちの1つが、「日本で初めて映画に字幕がついたころは、現在ほど句読点の基準が確定しておらず、見た目にわずらわしいことを理由に、省略したのではないか。」というものです。本書では、2005年の朝日新聞に掲載された句読点に関するコラムが紹介されており、新聞で句点が使われだしたのは戦後のようで、それまでの省略の理由が、限られた紙面の中で、なるべく多くの情報を盛り込みたいという意識の表れだと書かれているそうです。そのため、著者は、これを字幕翻訳に置き換え、句読点の省略は、限られた秒数の中に、なるべく多くの情報を盛り込みたいという思いが詰まっていると考えるそうです。

このように、本書では、字幕翻訳をしている太田さんだからこそ疑問に思うようなことを例と合わせて紹介されています。私自身、映画字幕に関しては冒頭のような疑問は浮かぶものの、特に気にすることはありませんでした。しかし、この本を読むことで、知識が増え、より一層、映画を楽しむことが出来そうだと感じました。映画をより一層楽しむきっかけとして、この1冊を読んでみてはいかがでしょうか。